

64. 石見国

島根県浜田市下府 JR山陰本線下府駅 2005.02.20

石見国は出雲の西に広がる細長い国である。山陰本線で出雲市駅を出て石見国へ入ると、大田、江津、浜田、益田と進み、山口線に入って津和野に着く。大田市駅から津和野まで直通の特急でも2時間以上かかる。古代には**安濃(あの)**、**邇摩(にま)**、**邑知(おほち)**、**那賀(なか)**、**美濃(みの)**、**鹿足(かなし)**の六郡からなる中国であった。

大和朝廷に政権を譲った**出雲族**が、西の**宗像族**と連合するのを牽制するため、大和から**物部氏**、**忌部氏**がクサビとしてこの地に入り、にらみを効かせたのだという説があるがどうか。

石見国府跡

古代の辞書**和名抄**は、石見国府は**那賀郡**に在りと伝える。その那賀郡の浜田市に、**上府(かみこう)**、**下府(しもこう)**という地名が残っている。その下府に**伊甘神社**がある。この神社の周辺に、**御所**、**御館府**などの古字名が残っており、**総社**も合祀されているので、国庁はこの神社の周辺に眠っていると推定されている。



国府跡の碑

伊甘神社境内に国府跡と書かれた碑が建っていた。



御所の池

神社の西奥に御所の池と称する池がある。国庁の庭園にあった池であるという。

伊甘(いかん)神社(石見総社)



伊甘神社

祭神は**天足彦国押人命**。伊甘郷を開拓したと伝えられる**猪甘首(いかんのおびと)**の祖である。とも、**小野氏**の祖であるとも伝えられているが、**石見国守**であったと思われる**柿本人麻呂**の祖先神でもある。**石見国庁**の跡地に建てられたと思われ、**印鑰神社**の棟札が残っている。**石見総社**の府中社を合祀してあるというが、どの社がそれなのかわからなかった。



鳥居

両脇に小さな境内社があるのも珍しい。



境内社

この中の一つが府中社(総社)なのだが。

金蔵寺(石見国分寺跡)

石見国分寺は**金蔵寺**という寺の境内に眠っている。昭和60年(1985)から国による発掘調査が行われ、12M四方の土壇上に8M四方の5重塔が建っていたことが確認された。さらにその北方から7世紀のものと思われる銅製の釈迦誕生仏が出土した。

私が訪れた時は、境内で新しい発掘が始まっていた。何が出てくるのだろうか。

延喜式の寺料は2万束。現在の金蔵寺は浄土真宗の寺である。



石見国分寺跡の史跡標



金蔵寺本堂



発掘現場



発掘現場から本堂を望む

国分尼寺跡

**国分尼寺跡**

これは無惨だ。いつまでこのままにしておくのだろうか。

**廃屋**

尼寺の跡地だが、国分僧寺が移ってこの建物は僧寺の建物のはずだが。

石見国一之宮(物部神社)

石見国一之宮は**大田市**にある**物部神社**だ。細長い石見国の最東端で出雲国に接する。大和朝廷から派遣された**物部一族**が、**出雲族**に備えて勢力を張ったところだ。西隣の**江津市**にある石見二之宮**多嶋神社**が出雲神の**事代主命**を祀るので出雲の勢力圏、その西の**浜田市**に鎮座する三之宮**大祭天岩門彦神社**は、**忌部氏**が創起したと伝えられているので、これは大和の忌部の支配圏。こう見てくると、大和朝廷に最後まで反抗した強力な出雲族を、物部、忌部という大和の豪族が、東西から牽制してきた歴史が、おぼろげながら浮かんでくる。

**拝殿**

祭神は物部氏の祖**宇摩志麻遲命**。背後の本殿は春日造。出雲の神社とはだいぶ趣が異なる。

**本殿**

天文一九年(1591)吉川元春によって再建され、その後火災に遭い現本殿は宝暦三年(1753)の建立。

**富金石**

砂金を含んだ石で作られた手水石。触れると財運が付くという。

歌聖柿本人麻呂の謎

石見国は万葉歌人柿本人麻呂の終焉の地だという。万葉集に次のような記事と、人麻呂の歌が載せられているので、石見国で亡くなったことは間違いなからう。

柿本朝臣人麻呂「石見国に在りて死に臨む時、自ら傷みて作る歌」

鴨山の 岩根し枕ける われをかも 知らにと妹が 待ちつつあるらむ

ところで地元では、柿本人麻呂は石見国守であったと信じられている。しかし、万葉集のこの記事には「死」という字が使われている。「死」という字は六位以下の人の場合に使用され、五位以上は「卒」、三位以上は「薨」という字を用いるのが古代の用例であった。従って、人麻呂は六位以下であり、五位以上が任命される国守にはなれないというのが、有力な学説であった。

これに対し梅原猛氏が、「水底の歌」、井沢元彦氏が「逆説の日本史」を書いて、反論した。人麻呂は罪を得て刑死したのであろうというのだ。罪を蒙ると名前を変えられ、位も落とされるのが普通であった。本来ならば石見国守として「卒」と表記されなければならないところ、罪人として死んだので六位以下の「死」と記されたのだらうと主張された。私もそのように思う。なぜなら、人麻呂は各地に柿本神社として鄭重に祀られているからだ。恨みを吞んで死んでいった者に対して、神として祀るのは菅原道真の例でもわかる。同じ万葉歌人で人麻呂と双璧と見られる大伴家持などは、このように鄭重には祀られていない。古今集の仮名序でも、人麻呂と山部赤人は甲乙つけがたいとしながら、人麻呂だけを歌聖として崇めているのも、こうした事情を反映しているのではないだろうか。



人麻呂公の像

益田市高津の柿本神社にある。背後の紅梅に映えて美しい。
私の好きな人麻呂の歌をいくつか紹介しておこう。

- ・^(あふみ)淡海の海 ^(うみ)夕波千鳥 ^(な)汝が鳴けば 心もしのに いにしへ思ほゆ
- ・^(さき)小竹の葉は み山もさやにさやげども 我は妹思ふ 別れ来ぬれば
- ・^(むかし)東の 野にかぎろひの立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ
- ・^(あみ)嗚呼見の浦に ^(ふな)船乗りすらむ をとめらが ^(たまも)玉藻の裾に 潮満つらむか

人麻呂は鴨山で死んだことになっているが、鴨山がどこかは諸説有る。ほとんどは石見国だが、なかには奈良の葛城山とする説もある。しかし、もっとも手厚く祀ってあるのは、ここ、益田市高津町の柿本神社だ。伝承では終焉の地の鴨山は、高津の沖にあった鴨島で、亡くなったあと勅命で社殿をその地に建立したが、万寿3年(1026)大地震により海中に没したという。

万葉集に鴨山五首と呼ばれる一連の歌がある。人麻呂の死を悼んだ歌だ。
そのうちの一首は、前記の自らの自傷歌だが、それに続く四首は下記の歌である。

まず、彼の妻依羅娘子(よさみのおとめ)の二首

- ・今日今日と 我が待つ君は 石川の貝に交じりて ありといはずやも
- ・直に逢はば 逢ひかつましじ 石川に 雲立ち渡れ 見つづ偲はむ

次に友人の丹比真人が人麻呂の気持ちになって詠んだ歌

- ・荒波に 寄り来る玉を 枕に置き 我ここにありと 誰か告げけむ

そして名前は伝わっていないが、同じように人麻呂の気持ちになって詠んだ歌
・天離(あまざか)る 鄙(ひな)の荒野に 君を置きて 思ひつつあれば 生けるともなし



本殿
変形春日造。折からの雪に映えて美しい。



なでしこ
我が宿に咲けるなでしこまひはせむ
ゆめ花散るな いやをちに咲け

[illegible]

<http://komatsu0513.heteml.jp/iwami.html>



[国府物語のトップページへ](#)